これに対して前方部北半部分は、1950年調査段階ですでに畑地化していたようであるが、更に、先述の1970年代の大規模農地開発によって残念ながら相当の改変を蒙っている。後円部中心点の北34mの地点で、東から延びる幅7mほどの農道が尾根を横切り墳丘を完全に切断している。農道はこの部分で屈曲し、前方部北半推定部分の西面を削り込みながら北に延びている。さらに農道西側では南北20m以上の範囲が投棄された建設残土に分厚く覆われ、この部分の形状観察が不可能となっている。丘陵東面は鶏舎と農道の設置で刻まれ、前方部東裾推定部分を相当に損なっている。尾根稜線部もこの時期にあらためて手を加えられたらしく、前回調査で前方部前端を反映するとされた里道は現存していない。しかし現状でも後円部頂とこの部分の比高は2m前後を測り、前回報告時のデータと異ならないので大幅な削平は蒙っていないと考えられる。なお墳丘外方ではあるが、後円部中心点から北約90m以北では連続する尾根そのものが大きく削平されており、全体的な地形的関連が現状では判りづらい。

《規模》

東～南斜面一帯の開墾によって多少、縁辺の形状が損なわれているとみられるが、後円部頂は南北17m、東西13～15mの小判形を呈する平坦面を認める。前回調査で検出ののち再埋置された3基の割竹形刳抜石棺は平坦面中心を避けるように、中央の東西と、中軸線よりやや西に偏したくびれ部よりの位置に現在も蓋頂部を露出させた状態で見出すことができる[6)]。

後円部東面から南面にかけての裾部では、標高65～65.5mあたりに微妙な傾斜変換点を見出すことができる。この部分は上述のとおり開墾時の改変を蒙っており、その点で墳端と断定することには不安が残るが、周囲の地形状況から、大きく違えることはないと思われる。この位置は、東面では後円部中心点から33m、南面では37mの位置になる。西面は墳丘が部分的に崩壊しており、明示しがたいが、単純に東面の所見を折り返せば横断径66mというデータが目安として得られるだろう。この数値は前回調査の後円径推測値とほぼ一致する。また墳頂平坦面の形状と対応して、後円部そのものも主軸（南北）方向にやや長い楕円形を呈するものと推測できる。なお、後円部の高さは南面の頂端推定位置から測って10m強となる[7)]。

農道切断部以南の前方部上面は、後円部頂より約3mほど低いレベルで、くびれ部に向かって徐々に広がる幅6～8m程度のやや広い平坦面となる。両者は緩やかなスロープで連結される。また前面に向かって、地勢に応ずるようにわずかに高まる。くびれ部～前方部南半の墳丘側面では東面がよく旧状をとどめるが、この部分では標高67m付近と68.5m付近の二段に微妙な傾斜変換点を見出すことができる。ともに墳丘主軸とほぼ並行するものである。後円部東面との連続に留意すれば、現時点では下位の67m付近の変換点を墳端ラインと捉えておきたい。墳丘主軸から約19mとなる。西面では変換点を確認することは困難であるが、単純にこの所見を折り返せば38mという数値が目安として得られる。これにしたがえばくびれ部は、やや幅広い形状となるだろう。また後円部南半に比べ、前方部中程で墳端レベルが2mほど高くなることに注意しておきたい。

農道切断部以北では現状の地表面観察から、本来的な前方部形状と規模を復元することは非常

に困難であるが、地形などからいくつかの推測材料を挙げることは可能である。北に連続する尾根線は後円部中心点より北 80 m、標高 75 m 付近を分岐点として東南東方向になだらかな支丘を派生させている。先に推測した前方部南半の東面墳端をそのまま北に延長すればこの支丘側面に当たるが、この部分に人為的な地形改変の痕跡は認めることができない。一方、丘陵西面は対応する辺りでやや抉り込まれ、かなり急傾斜な地形を呈している。したがってこの部分まで前方部の延長を想定することは難しく、前端は、これよりも南に位置すると考えるべきである。現存しないものの、前回調査で前方部前端を反映すると推測された里道を、今回作成した測量図に当てはめると、おおよそ今述べた東支丘派生部分の南縁（後円部中心点より北約 62 m）に復元できる。また、これよりも南よりの部分で墳端を推測する材料は得られない。積極的な根拠は提出できないものの、周辺地形を考慮すれば、1951 年調査の推定は妥当な内容といえるであろう。

これに従えば快天山古墳の墳丘主軸長は 99 m と推定される。また前方部長はおおよそ 40〜42 m で、前方部前端幅については現時点では推測困難である。以上、今回測量調査所見に基づく墳丘各部推定値をまとめると次のようになる。

墳　　長	99 m
後円部径	（東西）66 m
後円部高	10 m（南面から計測）
前方部長	40〜42 m
前方部高	5.5 m（中位部）
前後比高	約 2 m

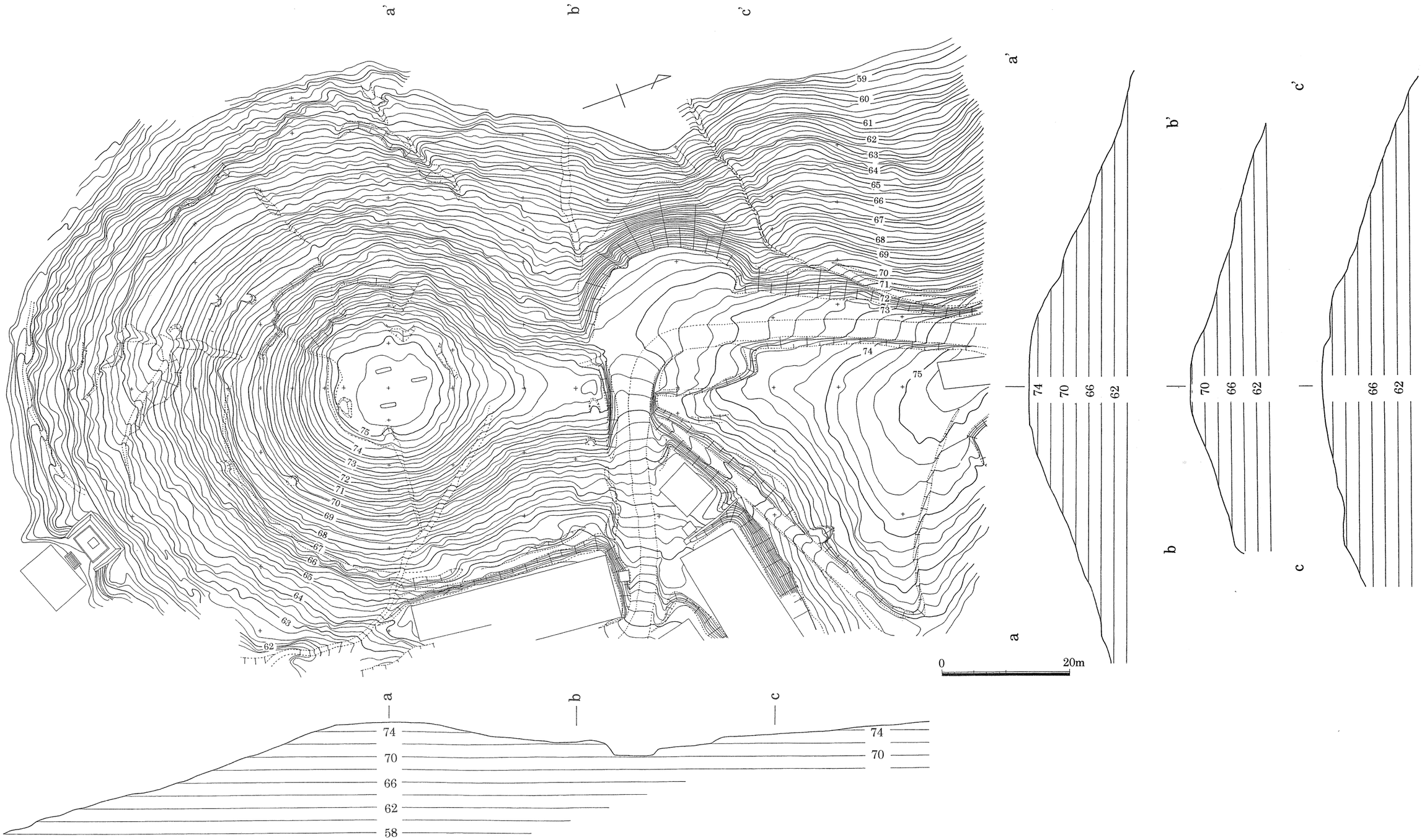
《墳丘形態と外表施設》

上記したように、今回の測量調査だけでは必ずしも墳丘各部の数値を確定することや、それ以上に墳丘形態の詳細を検討することは難しいが、墳丘形態と付帯施設・外表施設に関する調査時の観察所見について簡単に述べておく。

既に述べたように、後円部の平面形は墳丘主軸方向、すなわち尾根線方向にやや間延びした楕円形を呈する可能性が高い。前項で述べたように周辺地形を考慮すれば、後円部径の 3 分の 2 程度のやや短小な前方部を復元することになる。なお農道切断面の観察によれば前方部は基本的に地山を削り出して成形された可能性が高い。

また墳丘基底レベルは後円部南半ではほぼ水平となるが、くびれ部から前方部中位付近で 2 m 前後上昇するようだ。地形を考慮すれば、前方部前端レベルは相当高くなるものと思われる。この点も立地条件とともに本墳の重要な特徴の一つとなるだろう。

前項で前方部東面において、墳端ラインより上位に、今一つの傾斜変換点を見出せることを述べたが、このラインは地表面観察では非常に微妙だが後円部東面に向けて、基底部レベルの傾斜に並行して連続するように見える。南面から西面ではうまくその延長を追求することができないが、これを積極的に評価すれば後円部から前方部に連続する低い段を想定することができるであろう。推定墳端レベルとの比高は 1.5〜2 m 程度で墳丘基底を巡る基檀状の小テラスが取り付く



第 19 図　快天山古墳墳丘測量図（平成 13 年測図　1/600）

可能性がある。

また後円部南面では延長15ｍ程の範囲でこれより高い標高69.5ｍ付近に幅1ｍ内外の帯状平坦面を見出すことができる。既に述べたように後円部南～東斜面一帯は開墾時にかなり改変を蒙っていることと、この平坦部が現状では東西に連続して捉えられることから、判断は難しいが後円部中位にもう一段テラスが想定できるかもしれない。

また、前方部東面の農道切断部に接する部分で標高68～68.5ｍ付近に南北5ｍ、東西3ｍの比較的明瞭な方形壇を観察することができる。農道開削時の残土集積の可能性もあるが、注意しておきたい。

前回調査時の測量図では後円部南面裾とくびれ部西斜面に葺石が図化されている。現状では後円部南面の裾から墳丘外方ではごく疎らに拳大～人頭大の角礫・亜円礫の散乱を認めるが、原位置ないしはそれを反映するような状況は観察できない。くびれ部西面では明らかな墳丘外に二次的な葺石様石材の集積を認めるが、墳丘斜面では見出しがたい。また、前方部の墳丘切断面でも葺石を観察することができない。葺石の施工は認めうるが、その範囲や様態を推測することはむずかしい。

測量時に墳丘各所で円筒埴輪および器種不明の土師器片を採集したが、特定地点にまとまる傾向は見出せなかった。なお採集資料に明らかな形象埴輪を認めないことと、採集資料に中形壺の可能性のある土師器片が一定量含まれる点は注意しておきたい。

注

1） 1951年に刊行された前回調査報告（注2文献）には縮尺1/800、2ｍ等高線の墳丘略測図が掲載されている。また筆者は綾歌町教育委員会所蔵の快天山古墳前回調査記録写真の一枚に、報告書掲載図とは異なる墳丘測量図が写っているのを2001年夏に確認した。写真では測量図に「横山浩一実測」と注記されているが、現在同図の所在は明らかではない。1951年の京都大学調査時の測図であろう。

2） 和田正夫　松浦正一『史跡名勝天然記念物調査報告　第15　快天山古墳発掘調査報告書』香川県教育委員会　1951

3） 寺田貞次「讃岐に於ける前方後円墳について」『考古学雑誌』25―5　1935

4） 三谷寿夫『栗熊史談』　1938

5） 注4文献20頁に以下の記述がある。
「次に快天山頂上より峯続き約半町位の所に古墳一個を開墾に依って発見した。石箱即ち組合式の石槨（角閃安山岩）でその組合した石は巨大である。副葬品としては漢式鋸歯文鏡の破片及び埴輪円筒其の他土器破片を発掘した。」
また地元のお年寄りから、かつてその辺りに高まりが存在した旨を、2001年春に筆者も伺った。しかし、厳密な位置関係は不明で、前方部端の隆起をこのように理解したのか、あるいは、前方部に接して別の墳丘が存在したものか、現時点では判断できない。

6） 現在3基の石棺主軸は墳丘主軸から14°内外西に偏し、ほぼＮ5°Ｅとなる。先に述べた墳丘主軸方位を考慮すれば、このズレは敢えて棺埋置に関する方位規制の厳格な遵守を指向した可能性があり、興味深い。

7） 前回調査報告の本文では後円部高8ｍと記述するが、付載測量図を読む限りでは後円部南側から測って高さ10ｍとなる。誤植か。

〈追記〉

測量調査の後、2001年夏から綾歌町教育委員会では、墳丘確認調査を開始した。本稿で推測した測量調査所見の補正などは、今後の確認調査報告で果したい。

付章２　快天山古墳石棺の再検討及び最近の刳抜式石棺の調査例について

香川県立歴史博物館　渡　部　明　夫

１．快天山古墳石棺の再検討

快天山古墳の３基の石棺については、旧稿[1)]において、１号・２号石棺と３号石棺の形態に差異が認められ、３号石棺の形態や１号・２号石棺から３号石棺への形態変化の方向性が後出する石棺に継承されること、１号・２号石棺が石槨に納められるのに対して、３号石棺はより簡略化したと考えられる粘土槨に埋置されていることなどから、１号・２号石棺が３号石棺に先行すると共に、割竹形木棺の形態にもっとも近い１号・２号石棺を最古の刳抜式石棺とした。

この点について、本報告書で詳細な実測図が公表されることから、改めて３基の石棺の検討を行い、旧稿を再検討したい。

旧稿では主に『香川県史跡名勝天然記念物調査報告　第15集』[2)]の報告に基づき、快天山古墳の３基の石棺を以下のように整理した。

１号・２号石棺は、縄掛突起を除くと、平面形が長方形を呈し、棺身と棺蓋を合わせた横断面が円形で、いわゆる割竹形をなし、棺蓋・棺身の刳り込みは、横断面が半円形に近い形で、短辺部の平面形が弧状となる。

これに対して、３号石棺は、棺蓋・棺身とも、足部の幅が狭くなるとともに、棺蓋は高さを加え、その横断面は円の中心より下位で横切りした形を呈し、刳り込みは、短辺部の平面形が矩形となり、横断面は隅丸方形状であるなどの形態的特徴をもつ。

つまり、快天山古墳の石棺は、棺蓋と棺身を合わせた外形が円柱形で、刳り込みの短辺部が弧状を呈し、刳り込みの横断面が半円形に近いものから、足部の幅が狭く、棺蓋が高くなり、刳り込みの短辺部が矩形をなすとともに、その横断面が隅丸方形状になるものへと変化したと考えた。

今、改めて本報告にある快天山１号～３号石棺の実測図から、形態の特徴をみると、以下のようにまとめることができる。

１号石棺

① 棺蓋・棺身とも、平面形は中央部がやや膨らんだ長方形を呈し、両端に太い棒状の縄掛突起をもつ。

② 棺蓋の横断面は、幅に対して高さのやや高い半円形状をなす（横断面図部分で、高さは幅の約57.5％）[3)]。

③ 棺身の底部は完掘していないが、幅に対して高さがやや高い半円形状と考えられる（横断面図部分で、高さは幅の約59.1％と推定される）。底部の横断面は円弧状をなすと推定されており、側部は底部から急カーブで立ち上がり、直立気味にのびて、上端付近でわずかに内傾する。

④　棺蓋と棺身をあわせると、幅に対して高さがやや高い（横断面図部分で、高さは幅の約115％）。

⑤　棺身・棺蓋の両端につけられた縄掛突起は正面からみると楕円形を呈し、太い。しかも基部を細くして実用の便を図っている[4)]。

⑥　棺身の刳り込みの短辺部は、平面形が隅丸方形状をなす（棺蓋は不詳）。

⑦　棺身の刳り込みの横断面は外開きの台形状を呈する。棺蓋の刳り込みの横断面は、本報告の実測図では半円形であるが、調査時の写真によれば外開きの台形状を呈する[5)]。

２号石棺

①　棺蓋・棺身とも、平面形は１号石棺と同じく、中央部がやや膨らんだ長方形で、蓋の両端に太い棒状の縄掛突起をもつ。身には縄掛突起をもたない。

②　棺蓋の横断面は、幅に対して高さがわずかに高い半円形状である（横断面図部分で、高さは幅の約54.1％）。１号石棺と比較すると、頂部がやや広い弧状をなす。なお、頭部側端部では側部下端部分が内湾する。

③　棺身の外形は、側部が低く、わずかに内傾気味に直立し、底部は緩くて広い弧状を呈する。横断面図部分での高さは幅の約50％であるが、横断面は浅いＵ字形を呈する。１号石棺と比較すると、側部は底部から緩やかに立ち上がり、低い。底部は幅が広い。

④　棺蓋と棺身をあわせると、高さと幅がほぼ等しい（横断面図部分で、高さは幅の約102％）。しかし、平底気味の弧状の底部をもつため、横断面は円形にはならない。

⑤　棺蓋の両端につけられた縄掛突起は、１号石棺と同じく、正面からみると楕円形を呈して太く、基部を細くして実用の便を図っている。１号石棺に比べるとやや小ぶりの作りであるが、これは石棺の大きさに対応したものと考えられる。

⑥　棺蓋の刳り込みの短辺部は、頭部側・足部側とも平面形が隅丸方形状をなすが、棺身の刳り込みの短辺部は、足部側が弧状を呈し、頭部側が隅丸方形状をなす。

⑦　棺蓋・棺身の刳り込みの横断面は、いずれも外開きの台形状である。

３号石棺

①　棺蓋・棺身とも、平面形は足部の幅を狭く作り、両端に棒状の縄掛突起をもつ。

②　棺蓋の横断面は、１号石棺と比べて相対的により高くなるとともに、頂部がより狭くなる（横断面図部分で、高さは幅の約62.9％）。横断面図部分では高さの高い半円形状であるが、頭部側の端部では円の中心より下位で横切りした形である。

③　棺身の外形は、横断面が高さの高い半円形状をなす（横断面図部分で、高さは幅の61.4％）。１号石棺に比べて、側部がさらに内傾気味に立ち上がる。特に、頭部付近では側部の上部が屈曲して内傾する。断面図部分では、底部は円弧状に丸くなることから、その横断面は円の中心より上位で横切りした形を呈する。

④　棺蓋と棺身をあわせると、幅に対して高さが高い（横断面図部分で、高さは幅の約122％）。

⑤　棺身・棺蓋の縄掛突起は、全体的に基部の抉りが小さくなっている。棺蓋頭部の縄掛突起

は細く、華奢になり、正面からみると円形を呈する。また、棺身頭部の縄掛突起は、石材の形に規制されて、板状の突起となっている。

⑥　棺蓋・棺身とも、刳り込みの短辺部は、平面形がすべて矩形を呈する。

⑦　棺蓋・棺身の刳り込みの横断面は、いずれも外開きの台形状である。

⑧　造り付け石枕は、1号石棺・2号石棺の石枕と比較すると、石枕を形づくる突帯が細くなり、さらにその外側に二重の細い突帯を巡らし、より装飾的につくっている。

1号石棺と2号石棺の比較

旧稿では1号石棺と2号石棺を同一形態として扱ったが、上述した形態の特徴から、次のような両者の差異が明らかになった。

棺蓋の外形はともに横断面が半円形状を呈するが、2号石棺に比べて1号石棺は相対的に高さが高く、頂部は狭くなっている。

2号石棺の棺身は、高さが幅のほぼ1/2で、緩くて広い弧状の底部をもつのに対して、1号石棺の棺身は相対的により高くなり、底部もより狭くなる。棺身の側部については、2号石棺では低く、底部から緩やかに立ち上がるのに対して、1号石棺ではより高くなり、底部から急カーブで立ち上がっている。

棺蓋・棺身の刳り込みの平面形についてみると、2号石棺では棺身足部側の端部を唯一弧状につくり、他を隅丸方形状につくるのに対して、1号石棺では、棺蓋は明らかでないものの、棺身は隅丸方形状につくる。

1号石棺の刳り込みの立面形は、棺蓋・棺身とも2号石棺より急角度となり、垂直に近づいている。

前述したように、1号石棺の実測図によれば、棺蓋の刳り込みの横断面は半円形状であるが、県の調査時の写真によれば外開きの台形状である。相違の理由は明確ではないが、断面をとった場所によるものかもしれない。ここでは写真に基づき、1号石棺の棺蓋の刳り込みの横断面は外開きの台形状を基本としているものと考える。従って、1号石棺と2号石棺の蓋の刳り込みの横断面の形は共通していることになる。

また、石棺の平面形や縄掛突起、造り付け石枕などの形態は1号・2号石棺で共通しており、両者に類似点も認められる。

快天山古墳における刳抜式石棺の形態変化

2号石棺と1号石棺との形態的差異を明らかにすることができたので、さらに3号石棺との関係をみることにしたい。ここで3基の石棺に一定の形態変化が認められると、快天山古墳における刳抜式石棺の変遷を明らかにすることができる。

まず、棺蓋の外形についてみると、2号石棺→1号石棺→3号石棺へと幅に対する高さの比を増し、横断面が半円形に近いものから、相対的に頂部がより高く、狭いものへと変化している。

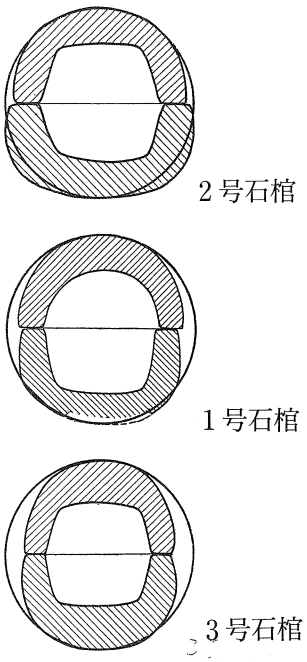
棺身の外形についても、2号石棺→1号石棺→3号石棺へと幅に対する高さの比を増し、緩くて広い弧状の底部をもつもの（2号石棺）から、相対的により高くなり、円弧状の底部を持つもの

(1号石棺)、さらに相対的に高くなり、底部がより狭くなるもの（3号石棺）へと変化している（第20図[6]参照)。

棺身の側部については、低いもの（2号石棺）から、比較的高いもの（1号石棺)、比較的高く、上部が屈曲して内傾するもの（3号石棺）への変化が想定できる。

刳り込みの短辺部については、平面形が隅丸方形状の刳り込みを基本としながらも、棺身足部側に弧状の刳り込みを残す2号石棺から、隅丸方形状の刳り込みをもつ1号石棺棺身（棺蓋は不詳)、矩形の刳り込みをもつ3号石棺への変化が認められる。

棺蓋・棺身の刳り込みの角度をみると、横断面では1号石棺と3号石棺に顕著な差が認められないが、2号石棺と比べると刳り込み角度がより垂直になっている。これを縦断面でみると、2号石棺がもっとも緩く、さらに1号石棺→3号石棺へとより垂直に近づいている。



第20図　快天山古墳石棺の形態変化
（3棺の蓋と身の高さを等しくして円内に図示）

次に、1号・2号石棺で共通し、3号石棺と異なる形態的特徴をみると、まず、石棺の平面形については、1号・2号石棺が中央部がやや膨らんだ長方形を呈するのに対して、3号石棺は足部の幅を細くつくっている。

造り付け石枕についてみると、1号・2号石棺とも幅広の突帯で馬蹄形状につくるが、3号石棺では石枕を形づくる突帯が細くなり、さらにその外側に二重の細い突帯を巡らし、より装飾的である。

縄掛突起は、1号・2号石棺が基部を抉った太い楕円形の縄掛突起をもつのに対して、3号石棺では、全体的に基部の抉りが小さくなり、一部に細い円形の縄掛突起を採用している。

以上のように、棺身・棺蓋の形態や、刳り込み短辺部の平面形、刳り込みの角度などが2号石棺→1号石棺→3号石棺へと変化し、石棺の平面形・造り付け石枕・縄掛突起などが2号石棺・1号石棺→3号石棺へと変化していることが明らかになった。

ところで、刳り込みの短辺部を矩形につくること、刳り込み角度が垂直化する傾向、足部を細くつくる石棺の形、円柱状の縄掛突起、造り付け石枕の装飾化などの3号石棺の特徴は、新しい時期の刳抜式石棺に受け継がれており、棺蓋が相対的に高くなり、頂部が狭くなる傾向は、後に棺蓋の屋根形化につながり、3号石棺の棺身上部が内傾する特徴は、屈曲部が後に磨臼山古墳[7]をはじめとする棺身の突帯へと変化するものと考えられる[8]。

以上のことから、快天山古墳の3基の刳抜式石棺は、2号石棺がもっとも古く、次いで1号石棺がつくられ、最後に3号石棺が作られたと考えられる。その結果、快天山石棺から見た最古の刳抜式石棺の形態は、旧稿で考えたような円柱形をした石棺ではなく、棺蓋の横断面は半円形を呈するものの、広く緩い弧状の底部をもち、側部が短く立ち上がった棺身をもつものであった。

3基の石棺のうち、2号石棺と1号石棺にいくつかの共通する特徴があり、1号石棺と3号石棺との差異が比較的大きいことは、2号石棺がつくられた後、1号石棺が比較的近接した時期につくられ、さらに3号石棺がやや時期をおいて作られたことを示しているのであろう。

また、1号石棺と2号石棺が後円部のほぼ中央に併置され、ともに石槨に覆われていたのに対して、3号石棺がやや前方部寄りに位置し、より簡略された葬法である粘土槨に埋置されていたことは、1号・2号石棺にくらべて3号石棺の埋置が遅れたことを示すものと考えられる。

2号石棺と1号石棺については、製作の順序に埋納された可能性が高いものの、両石棺の形態や埋葬施設、埋葬位置に共通点が多いことから、同時に埋置された可能性もある。

いずれにせよ、3基の石棺の埋納順序については今後の発掘調査で確定する必要がある。

快天山古墳石棺の評価

以上のように、快天山古墳石棺は2号石棺→1号石棺→3号石棺へと変化したと考えられるが、変化の方向がほぼ一定していること、変化に大きな断絶や飛躍が認められないことから、これら3基の石棺は特定の技術者集団によって、特定の工房で、石棺や石棺製作の理念、石材加工技術などを濃厚に継承しながら製作されたものと想定される。

それを可能にしたのは、旧稿でも指摘したように、快天山古墳石棺の製作が刳抜式石棺の中でもっとも古く、他に高度な技術を有する石棺製作技術集団が存在しなかったため、外部からの強い影響を受けなかったためであろう。

3基の石棺の製作技術については、今後の石棺の再調査によらなければならないが、いずれにせよ、2号石棺を最古とする快天山古墳の3基の刳抜式石棺は、わが国でもっとも古い石工集団が製作した石棺の具体的内容を示す貴重な資料であり、後の長持形石棺や家形石棺を生み出す石材加工技術のもとになったことに重要な意味がある。

しかも、初期の刳抜式石棺が畿内中枢部の大型前方後円墳から発見されていないことからすると、刳抜式石棺の創製に畿内政権が直接関与した証拠はなく、それが讃岐の地で開始され、後に古墳の墓制に大きな影響を及ぼしたことは、古墳文化のありかたや当時の畿内政権と地域との関係を考える上からも注目すべきことである。

2．岩崎山4号古墳の刳抜式石棺について

ところで、大川郡津田町の岩崎山4号古墳の刳抜式石棺は、この種の石棺には珍しく、棺身の両端部に石枕を造りつけ、合葬を意図して製作されている。

火山系の凝灰岩[9]を用いてつくられたこの石棺は、北側がやや幅広となり、南側を細くつくること、石枕が装飾的であること、棺蓋に「田」字状の突帯をつけ、棺身の両測に一条の突帯をもつことなど、快天山古墳1号・2号石棺より新しい特徴をもつ。

突帯をのぞくと、棺蓋・棺身とも横断面が半円形に近く、棺蓋と棺身を合わせると円柱形を呈する。棺蓋・棺身とも合わせ口の近くに巡らされた突帯部分が最大幅となり、突帯から合わせ口までの外面は内傾する。幅に対する高さの比は、棺蓋で約46.8％、棺身で約50.3％、幅に対する

棺蓋と棺身を合わせた高さの比は約96.4％である。なお、最古の刳抜式石棺が整った円柱状を示さないことは、快天山古墳2号石棺で見たとおりである。

刳り込みは、棺身の横断面が長方形を呈し、棺蓋の横断面がやや外開きの台形をなし、そのコーナーは角をもつ。棺蓋・棺身とも刳り込みの縦断面は長方形である。

岩崎山4号古墳石棺を特徴づけるものに、棺蓋・棺身に施された突帯がある。突帯は幅約4㎝、高さ2～3㎝で、基部がやや幅広の長方形を呈する。棺蓋の突帯は、上面から見ると、合わせ口付近と両端付近を「口」字状にめぐり、さらに棺蓋の頂部と中央部で突帯を交差させて「田」字状に巡らせる。棺身の突帯は合わせ口付近を水平にめぐる。

合わせ口付近に突帯をめぐらせる石棺は大阪府柏原市安福寺石棺[10]をはじめ、鷲ノ山石を用いた石棺に多いが、高松市石清尾山石船塚古墳石棺[11]の突帯は幅広くなり、棺蓋と棺身の側部が垂直に合わさっているので、岩崎山4号古墳石棺よりやや新しく位置づけることができる。善通寺市磨臼山古墳石棺の突帯は細く、突帯から合わせ口までの外面は緩く内傾し、石枕に勾玉状の陽刻をもつなど、岩崎山4号古墳石棺との類似性が大きいことから、両者は近接した時期に位置づけられると共に、突帯をもたない快天山古墳3号石棺より新しくなるものと思われる。

3．刳抜式石棺の最近の調査について

ここでは、旧稿を公表した平成6年以降の香川県産石材に関係する刳抜式石棺の調査等を紹介する。

大阪府久米田貝吹山古墳

久米田貝吹山古墳[12]は大阪府岸和田市池尻町に所在し、古墳時代前期から中期の古墳群である久米田古墳群の中で、前期の有力首長墳とみられる前方後円墳である。

墳丘は全長約130ｍ、後円部直径約75ｍを測る。後円部から破壊された竪穴式石室と赤色顔料が塗られた白色凝灰岩の石棺破片が検出され、刳抜式石棺を納めた竪穴式石室が構築されていたと考えられている。

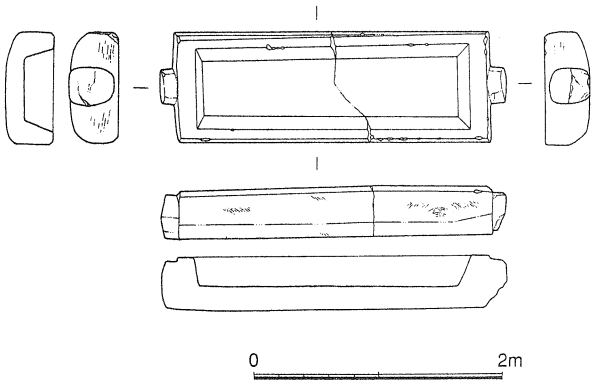
刳抜式石棺は石材を再利用するために分割・搬出されたようで、全体の形態を知り得ないが、3面に顔料が残っていて棺蓋か棺身の縁部と思われるもの、石枕の可能性のあるわずかな抉りをもつもの、縄掛突起の一部と思われるもの、表面に何らかの文様が彫られたものなどがあるとされている。

円筒埴輪のほか、副葬品として銅鏡片・鍬形石1個体以上・車輪石3個体以上・石釧2個体以上・碧玉管玉約40点・銅鏃13・刀剣・鉄鏃・小札革綴冑の一部と思われる小札・鉄斧などが出土した。

凝灰岩は大川郡津田町などに産出する火山系の石材と考えられており、火山系の石材を用いた刳抜式石棺としては、畿内で初めて確認されたものである。調査概報の写真によれば、やや幅広の低い突帯をもつ石棺破片があり、突帯をもった石棺が用いられたものと思われる。突帯がやや幅広で低いとすると、岩崎山4号古墳石棺より新しい時期のものと考えられる。

徳島県大代古墳

香川県と徳島県を区分する阿讃山脈の東端南麓の尾根上に位置する前方後円墳[13]で、徳島県鳴門市大津町大代字日開谷に所在する。墳丘規模は全長約54m、後円部直径31～45m、前方部長約23mで、後円部に長さ3.7m、幅1.0～1.1mの竪穴式石室が南北に構築され、その内部に刳抜式石棺（第21図）を納めていた。



第21図　徳島県鳴門市・大代古墳の石棺

石棺の蓋は残されていなかったが、棺身は両端に短い縄掛突起を有し、縄掛突起を含む全長は2.84m、幅0.87m、高さ0.42mを測る。浅い舟底状を呈する広くて平たい底部に、直立する側部をもつ。刳り込みの平面形は、北側がわずかに広い長方形で、横断面は外開きの台形、南側小口壁のみ垂直近く立ち上げる。刳り込みの各コーナーは明瞭な角をもつ。石枕はみられない。外底面を除いて水銀朱の塗布が認められた。

火山系の凝灰岩を用いたと考えられている。現在のところ火山系石材を用いた刳抜式石棺に類似した棺身は認められないが、鷲ノ山石を用いた石棺と比較すると、棺身の横断面は高松市三谷石船古墳石棺[14]に近く、両者は相似た時期に比定されよう。

円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・盾形埴輪・靫形埴輪とともに、盗掘埋土中を中心に獣形鏡片・凝灰岩製管玉5・滑石製臼玉538・銅鏃7・鉄鏃26・鉄剣1・鉄剣片10・鉄刀片4・鉄矛片7・長方板革綴短甲1・鋤先2・鉄斧5・刀子15・鉋16・手鎌1・鉄鑿2などを出土したほか、主体部墓壙を切った土坑から碧玉製勾玉2・凝灰岩製管玉10が出土した。円筒埴輪は川西氏の編年[15]のII期に比定している。

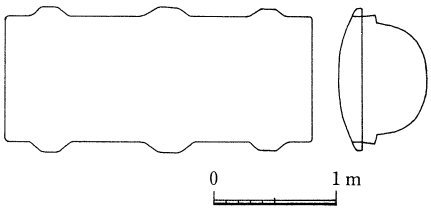
高松市長崎鼻古墳

高松市屋島西町屋島国有林26林班は3小林班に所在する前方後円墳[16]で、古代には島であった屋島の先端（北端）に立地する。全長45m、後円部径28m、同高さ5m、前方部最大幅20m、同高さ3.6mを測り、後円部、前方部とも3段築成で、前方部が高いのが特徴である。高松市の確認調査により、後円部に刳抜式石棺を納めた竪穴式石室が確認された。

刳抜式石棺は竪穴式石室の盗掘穴にあらわれた一部を検出したのみで、全体の詳細を知ることはできなかったが、阿蘇熔結凝灰岩製で、棺蓋は、平面形が低い台形状をした縄掛突起を両長側部に3個ずつもち、横断面が低い蒲鉾状を呈する。棺身は両長側部の上端に幅11㎝、高さ7㎝の突帯をもち、突帯の上面に棺蓋が被さるものと考えられる。棺身底部の横断面は半円形状をなす。石棺の規模は全長約2.5m、縄掛突起を除く棺蓋及び棺身の幅約1m、棺蓋の高さ約0.2m、棺身の高さ約0.55mと推定されている。

第22図は、発掘調査時の観察による想定図である。調査者の報告と細部が異なるが、参考のため提示しておく[17]。

棺身両長側の上端に突帯を巡らし、半円形状の底部をもつ刳抜式石棺は、福岡県大牟田市密柑山石棺[18]や佐賀県佐賀市久保泉熊本山古墳[19]、熊本県八代郡竜北町太尾古墳[20]、八代郡宮原町室ノ山2号墳[21]で出土しており、長崎鼻古墳石棺は熊本県北西部を中心とした地域からもたらされたことが想定される。



第22図　高松市・長崎鼻古墳の刳抜式石棺想定復元図
（蓋・短側面、報告図面を一部改変）

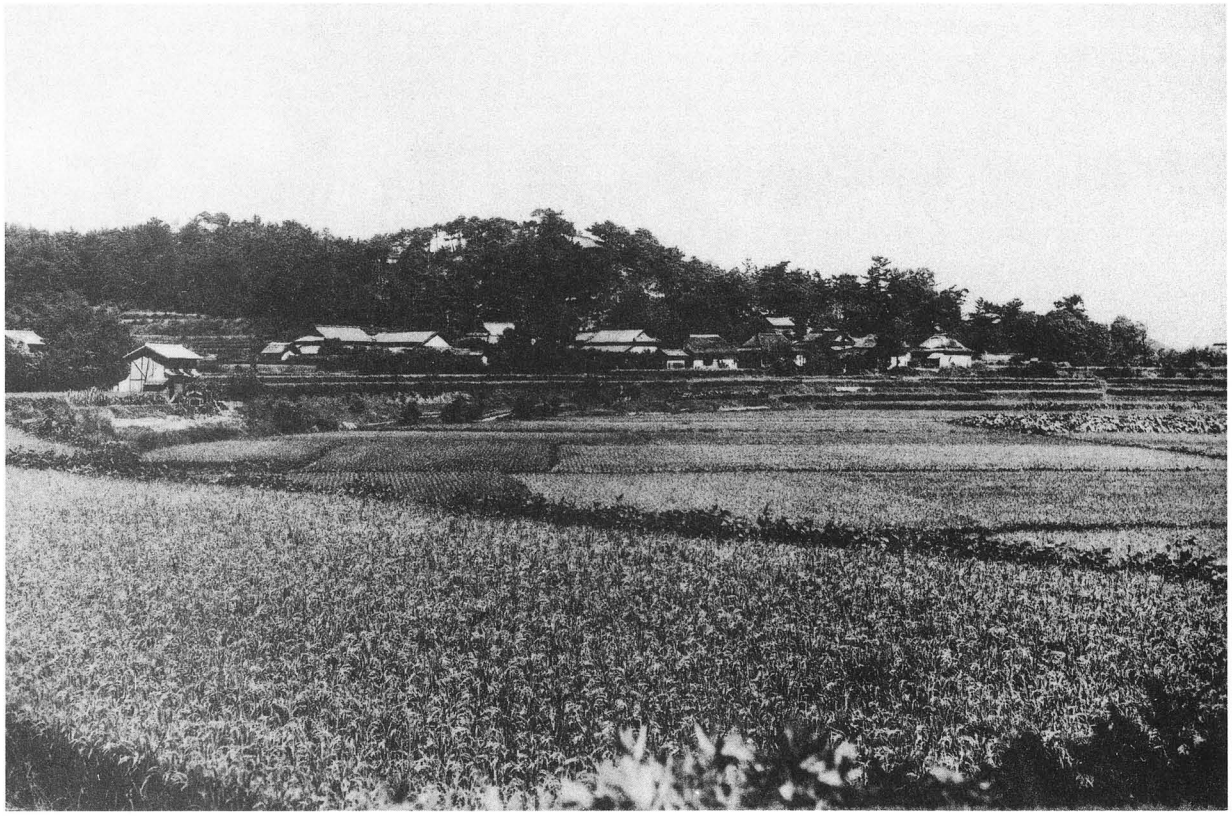
長崎鼻古墳の刳抜式石棺は、古式の長持形石棺の蓋を思わせる低い蒲鉾状の棺蓋をもつこと、横断面が半円形状の棺身をもつと考えられることなどから、5世紀初頭に位置づけられる。香川では、阿蘇熔結凝灰岩製の刳抜式石棺をもち、これまで5世紀中頃～後半と考えられていた観音寺市丸山古墳[22]、青塚古墳[23]より古く、香川における最古の阿蘇熔結凝灰岩製刳抜式石棺であるとともに、香川における刳抜式石棺製作の最終段階または終了段階での石棺の搬入として注目される。

註

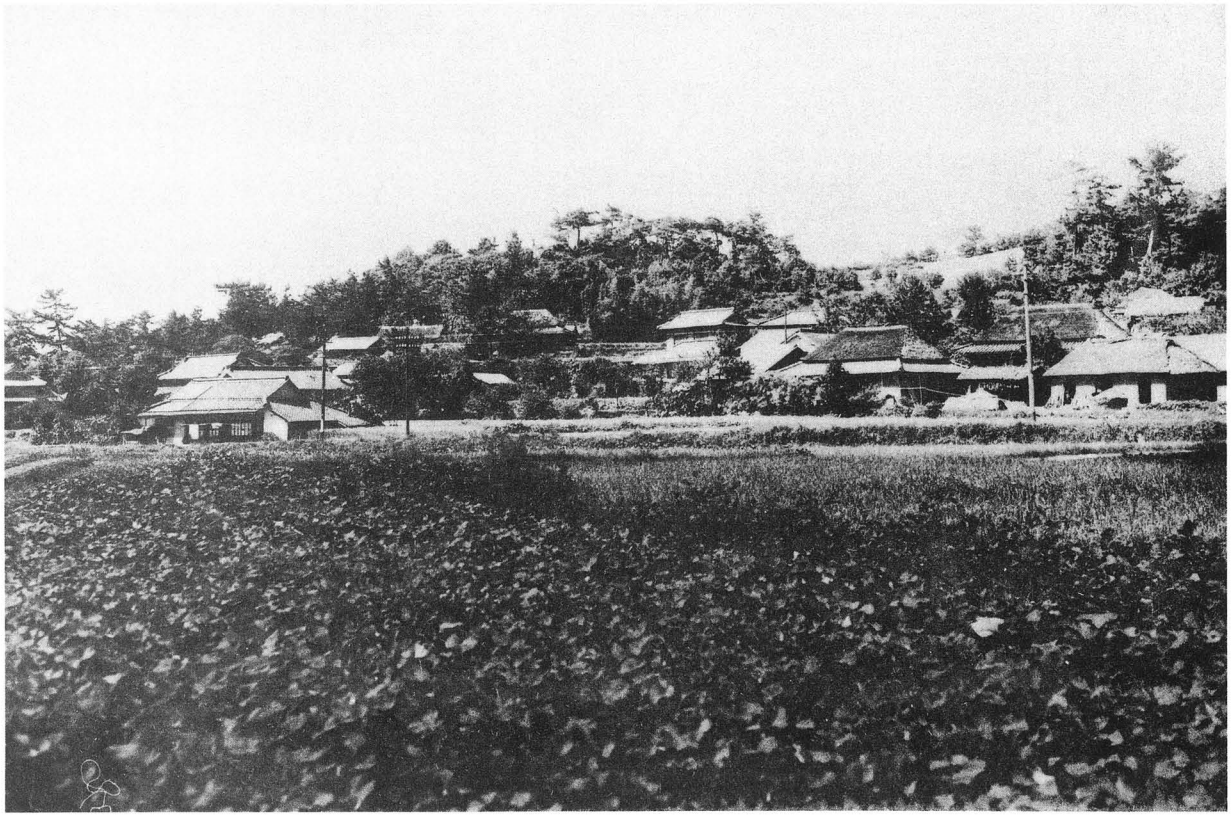
1）渡部明夫「讃岐の刳抜式石棺について」『香川史学』 19　1990
渡部明夫「四国の刳抜式石棺」『古代文化』 46―6　1994
2）和田正夫・松浦正一『快天山古墳発掘調査報告』香川県史跡名勝天然記念物調査報告　15　1951
3）以下の数値は、図面の計測によるものである。
4）棺蓋頭部側の縄掛突起のみ先端が太くならないが、註2の報文では、石材の余裕がなかったためとしている。製作時またはその後の欠損の可能性もあろう。
5）註2文献の図版第二―3（第一号石棺開棺状況及び綾歌町教育委員会保管の写真による。）
6）第20図は、1号～3号石棺の棺蓋と棺身の高さを等しくし、それぞれの高さ、幅、形の関係を比較したものである。
7）長町章「讃岐国に於ける石枕ある二、三の石棺に就いて（補遺）」『考古学雑誌』 9―10　1919
梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告　12　1933
真鍋昌宏・玉木一枝「磨臼山古墳」『香川県埋蔵文化財調査概報』 1984
8）なお、棺身上部が屈曲して内傾する特徴は、福岡県嘉穂郡稲築町沖出古墳の石棺にも認められる。従来この石棺は棺蓋の形から、火山系の凝灰岩を用いた石棺群の影響のもとに九州で最初に製作された刳抜式石棺とされていた。古式の火山石系石棺群の棺身がこれまで考えられてきたように半円形であれば、鷲ノ山石石棺群の影響も受けたことになり、再考を必要とする。大川郡津田町赤山古墳の石棺の詳細な検討が必要である。
高木恭二「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』 1987
新原正典・唐木田芳文『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書　2　1989
9）白色凝灰岩は、大川郡津田町火山だけでなく、大川郡から坂出市にかけて採石跡が広く確認されつつあり、火山石石棺群の石材産出地は再検討する必要がある。
10）梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告　12　1933
北野耕平『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告　1　1964
北野重『重要文化財安福寺石棺保存整備事業報告』柏原市文化財概報　1996―III　1997
11）梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告　12　1933
本田南都子「古墳時代前期の讃岐と畿内」『文化財学論集』 1994
12）吉井秀夫『久米田貝吹山古墳　第1～4次調査概報』立命館大学文学部学芸員課程研究報告　7　1998

13) 幸泉満夫・橋本寿夫「大代古墳」『亜讃山脈東南縁の古墳群 ―四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査概報―』 2001
14) 長町彰「讃岐国に於ける石枕ある二、三の石棺に就いて」『考古学雑誌』 9―1 1918
梅原末治『讃岐高松石清尾山石塚の研究』京都大学文学部考古学研究報告 12 1933
15) 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』 64―2 1978
16) 山元敏裕「長崎鼻古墳」『高松市内遺跡発掘調査概報 ―平成11年度国庫補助事業―』 高松市埋蔵文化財調査報告 45 2000
17) 石棺復元の根拠はごくわずかなものであり、想定図は参考図にすぎない。復元図を作成するにあたっては、九州系の同種の石棺を参考に、棺身・棺蓋の長さと幅は同じと仮定した。なお、棺身は2個の石材を用いている可能性がある。
18) 秀嶋龍男「石櫃山古墳」『大牟田市文化財調査報告書』 19 1983
19) 木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」『佐賀県文化財調査報告書』 16 1967
20) 高木恭二「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』 46―5 1994
21) 佐藤伸二『室ノ山古墳調査報告』 1976
22) 和田正夫「丸山古墳とその石棺」『香川県史蹟名勝天然紀念物調査報告』 14 1950
久保田昇三『丸山古墳』観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 1999
久保田昇三『丸山古墳 II』観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書 2000
23) 藤田憲司「讃岐の石棺」『倉敷考古館研究集報』 12 1976

図　　版



快天山古墳の遠景（北から）

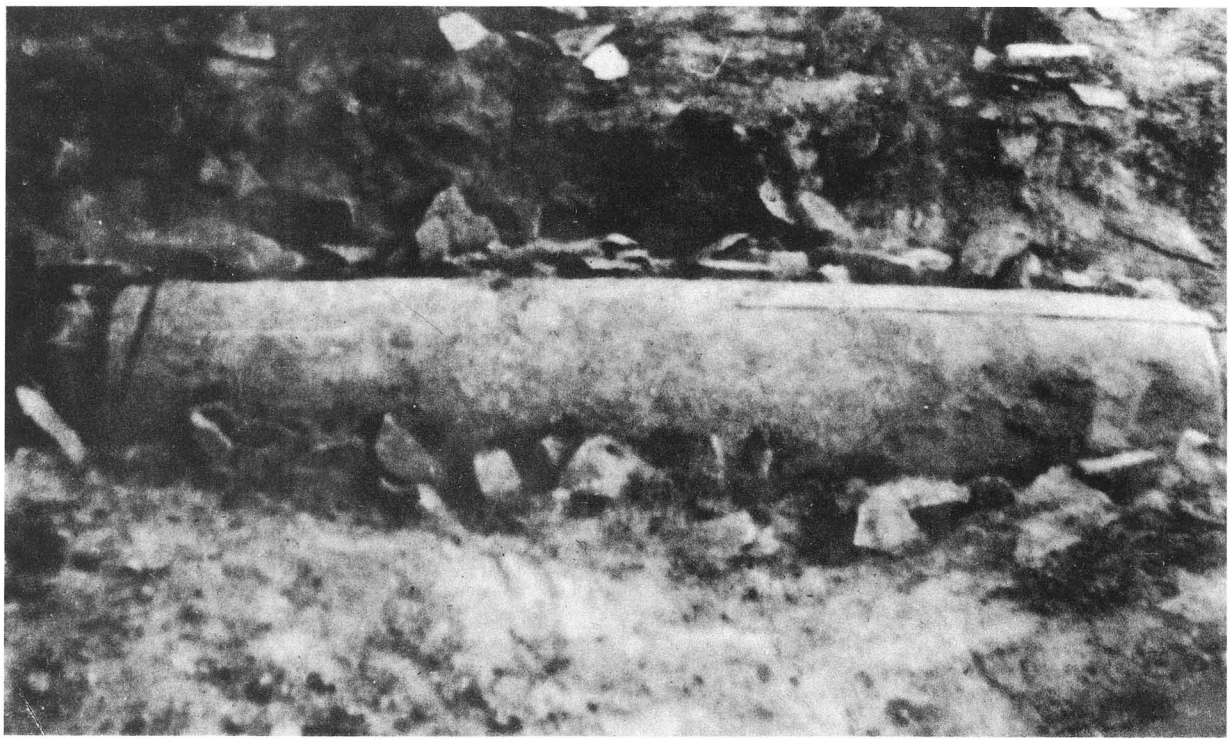


快天山古墳の遠景（南から）

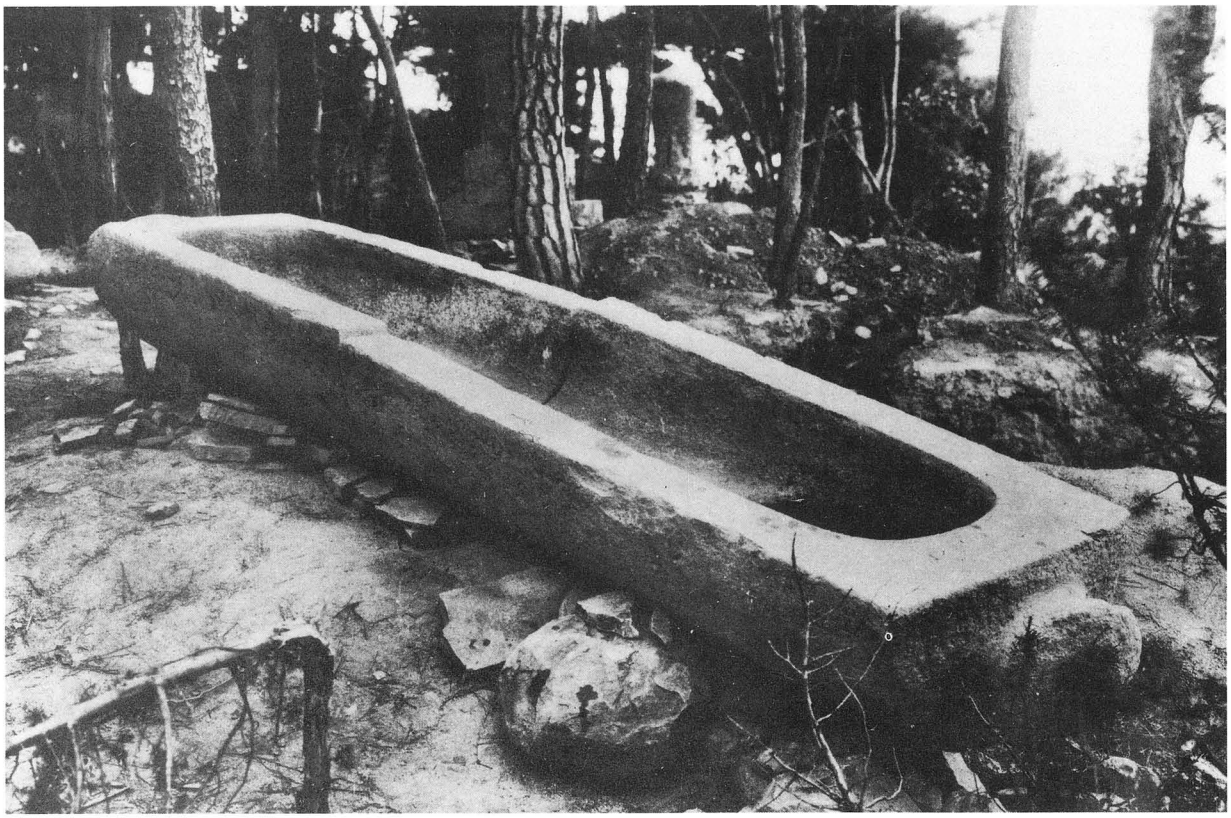
前方部側からみた後円部

後円部墳頂の快天墓と露出した第１号石棺

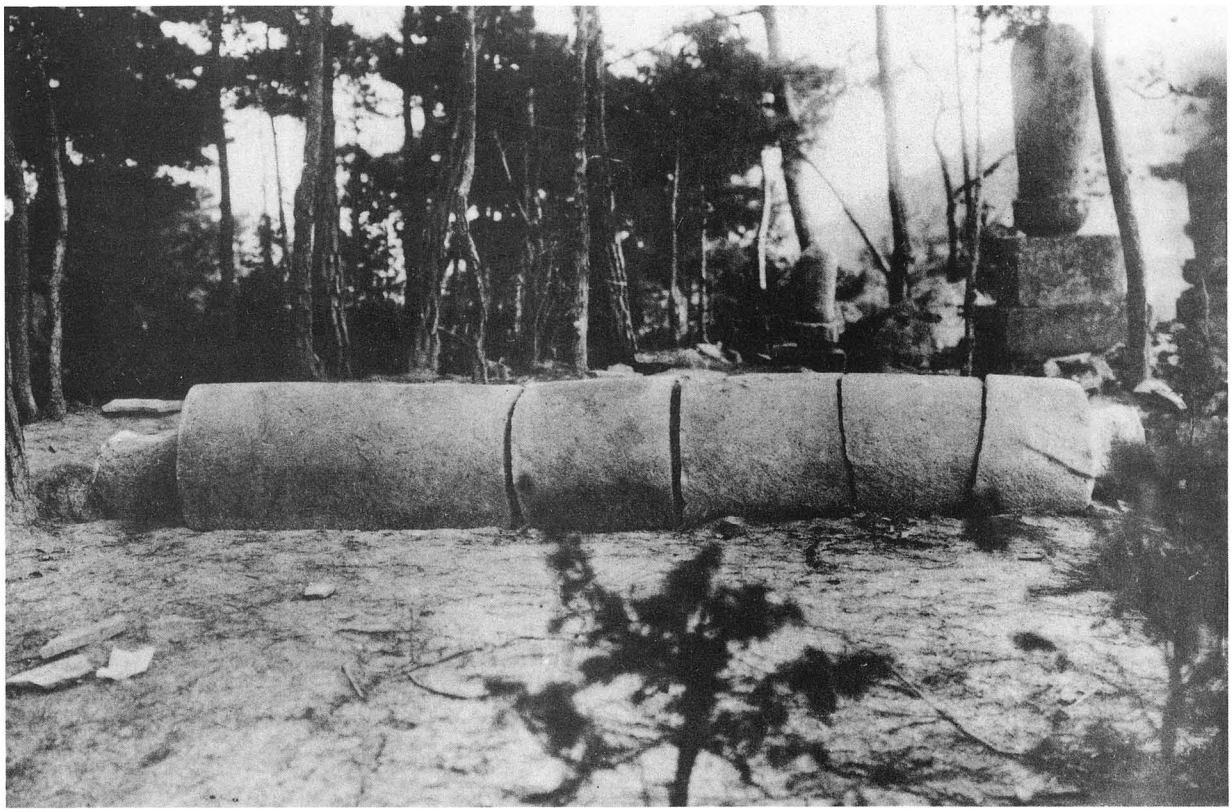
第１号石棺の出土状況（上の左右　石棺身、下　石棺蓋を除去した状況）

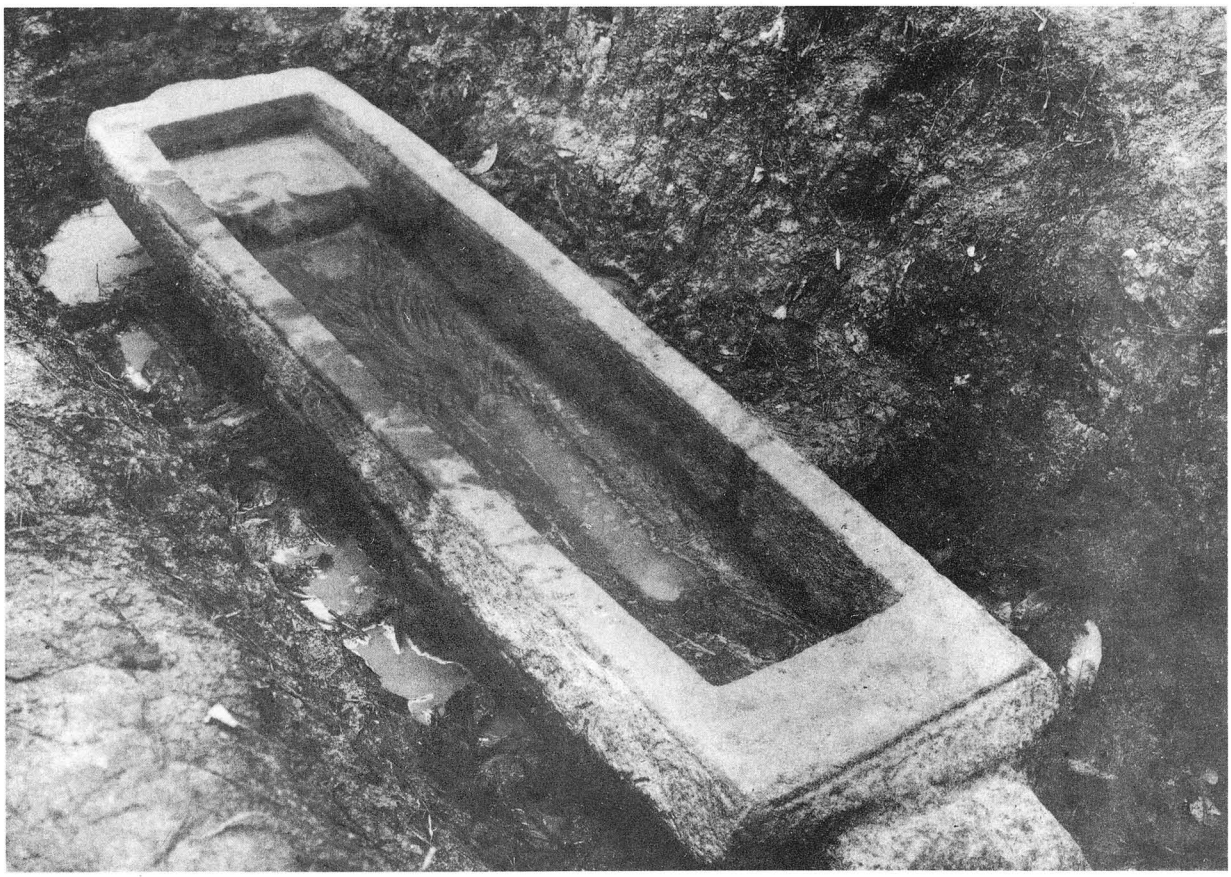


第２号石棺の石棺蓋と周辺の石積みの検出状況



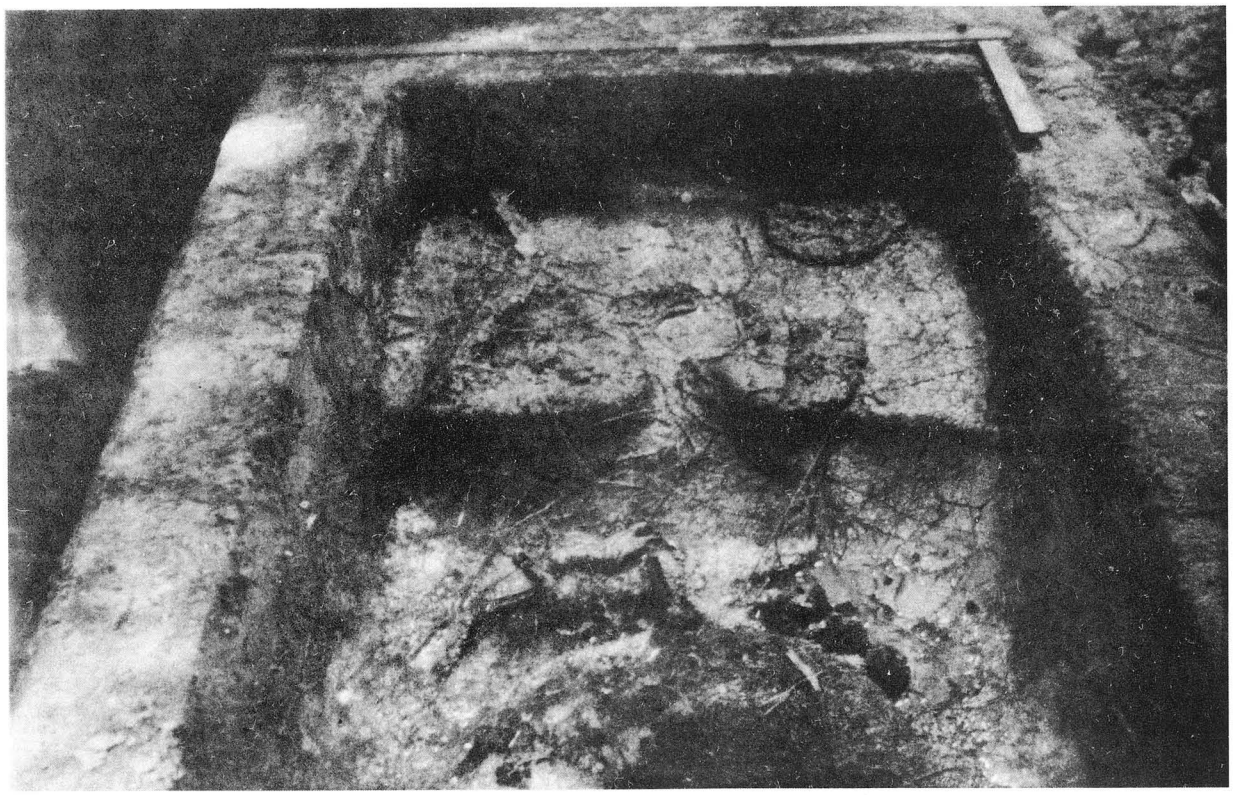
第2号石棺（上　石棺蓋、下　石棺身）



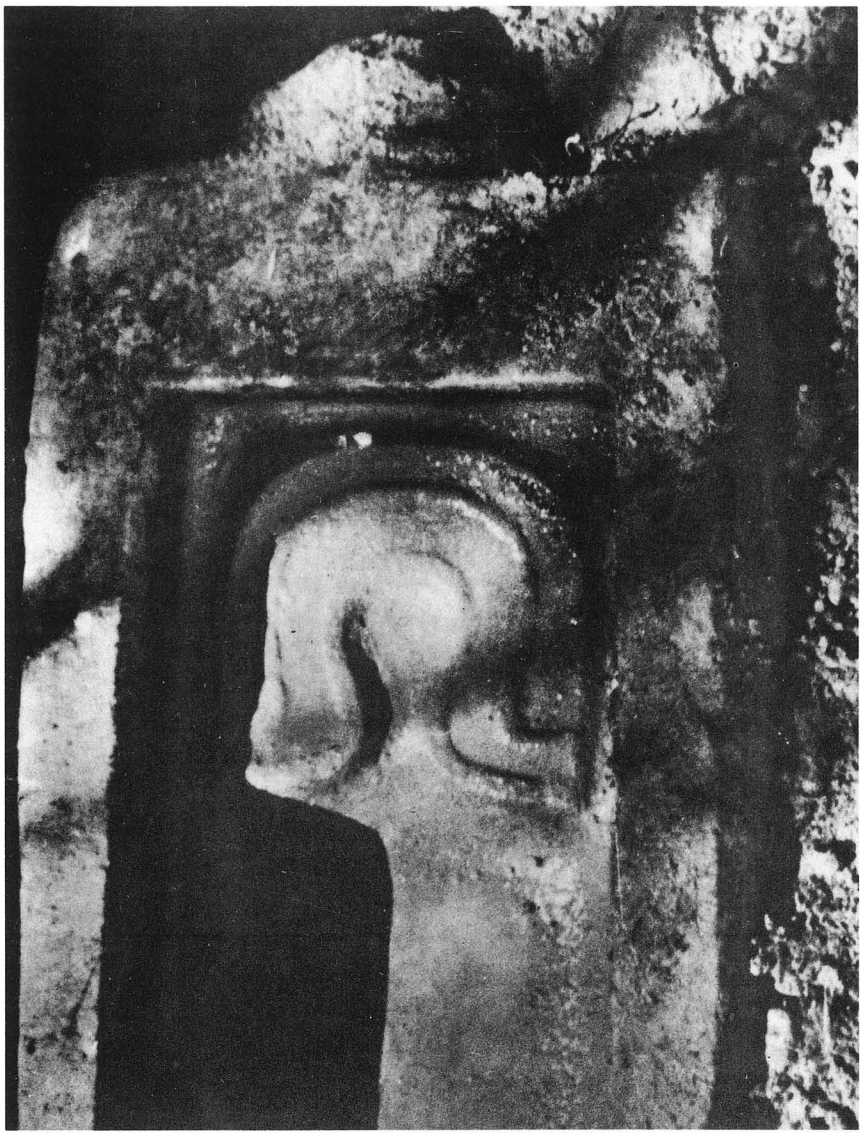


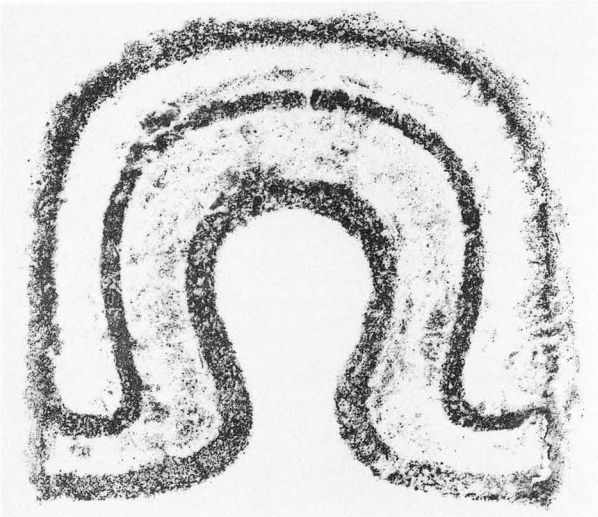
第3号石棺（上　石棺蓋、下　石棺身）

第１号石棺外の方格規矩鏡出土状況

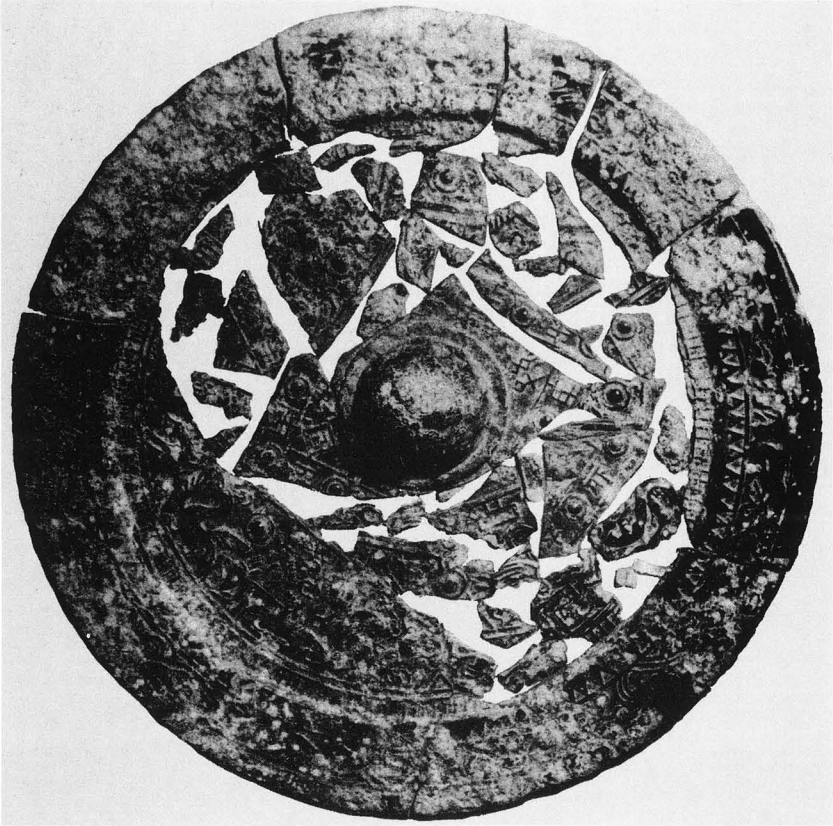


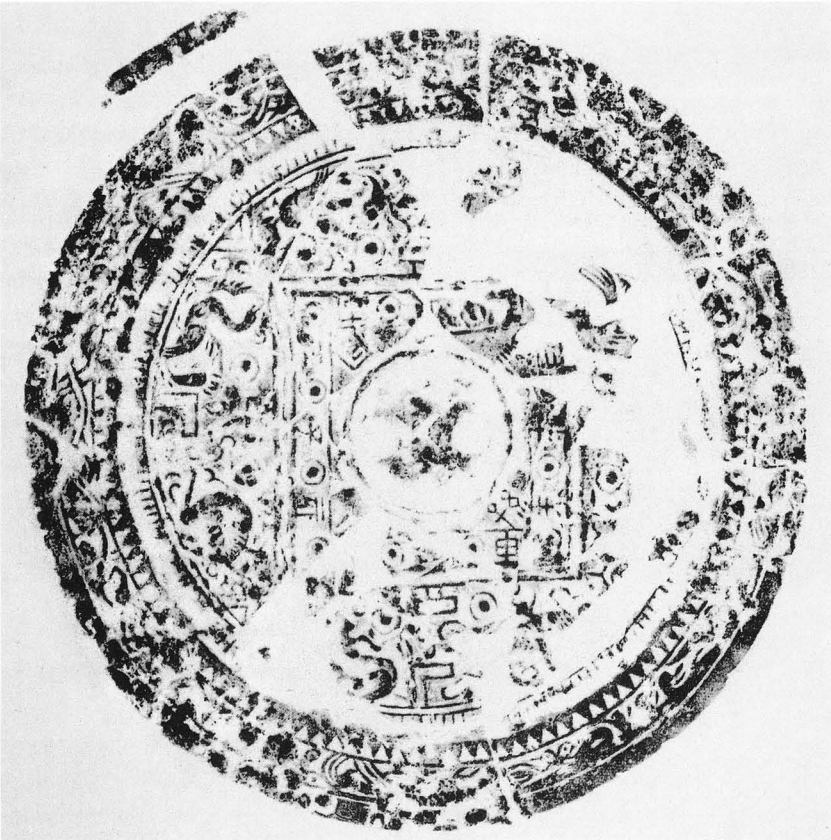
第３号石棺内頭辺部の状況（右隅は内行花文鏡）



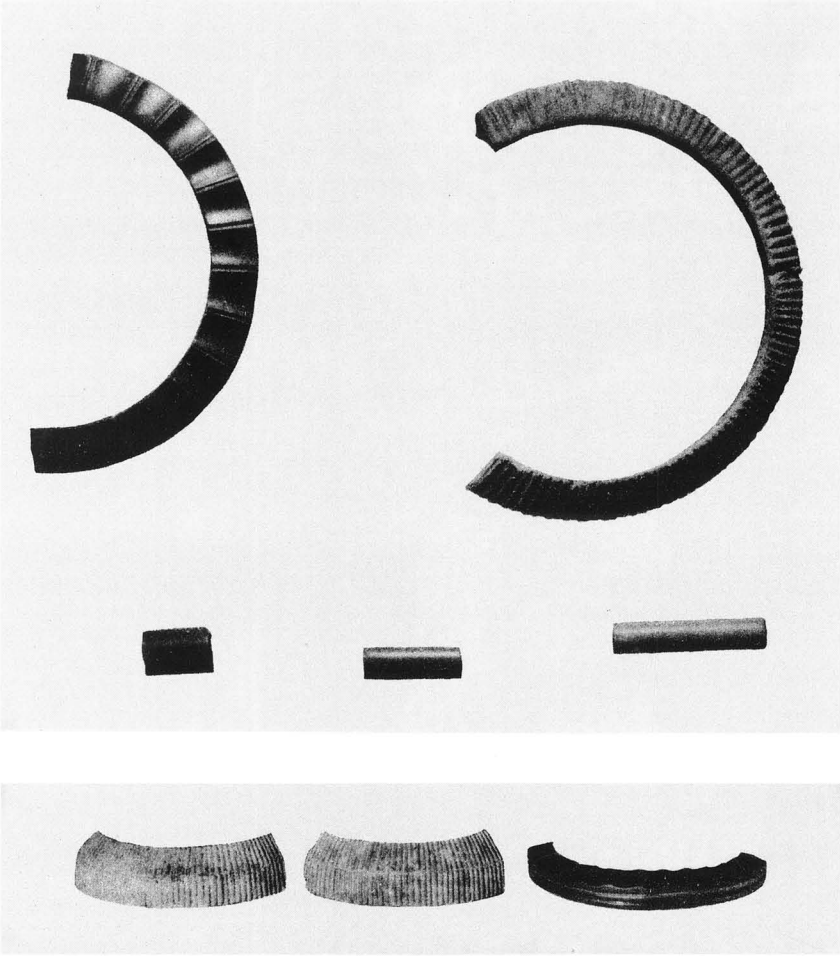


第３号石棺の造り付け枕（下は同上部拓影）

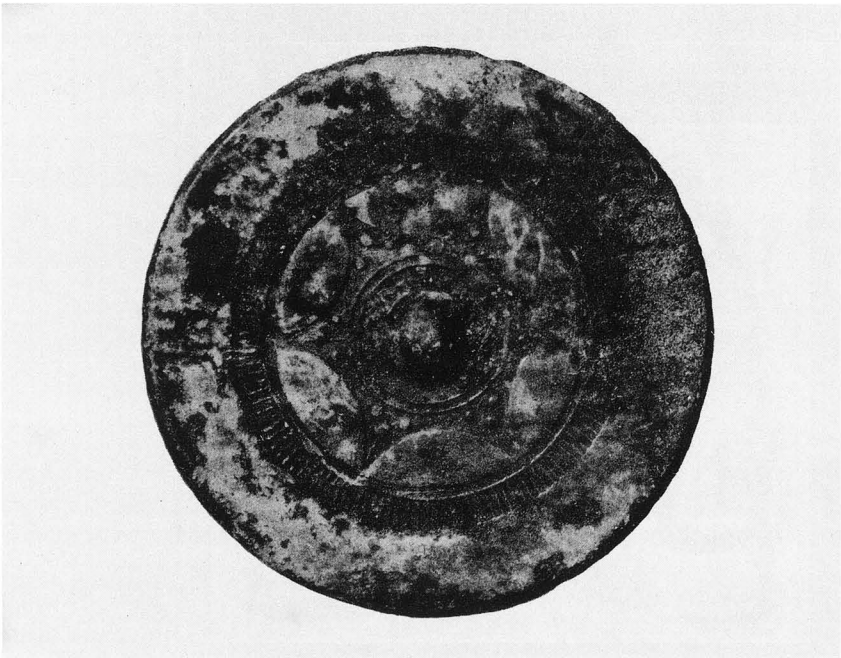


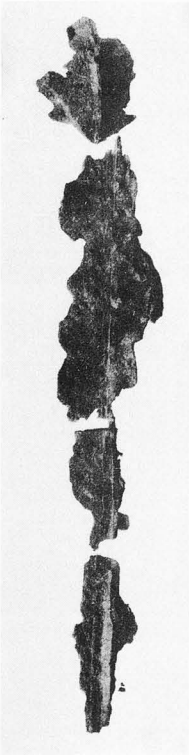


第１号石棺外出土の方格規矩鏡（下は同上拓影）

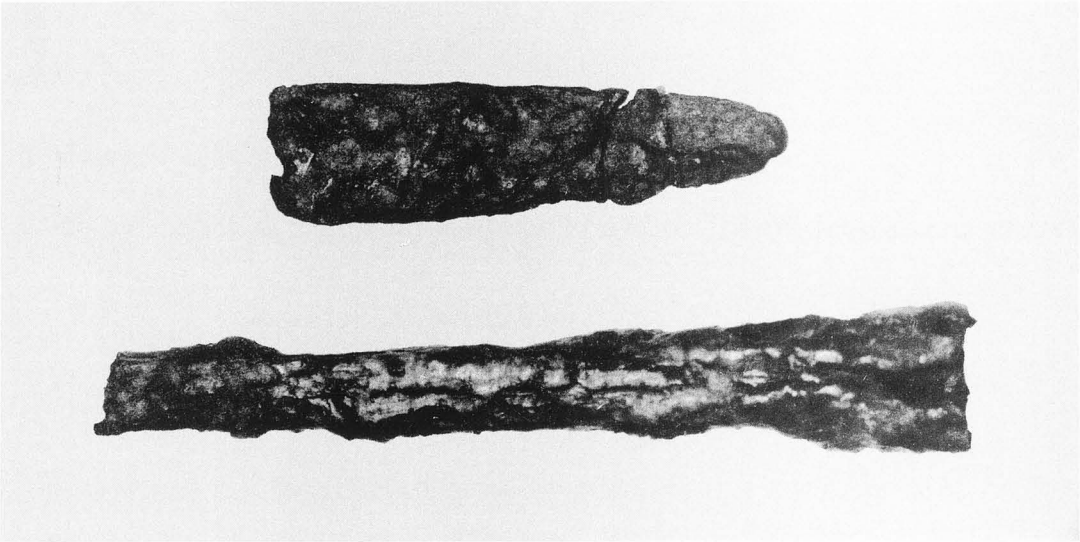


第 1 号石棺出土の装身具類（石釧・管玉）

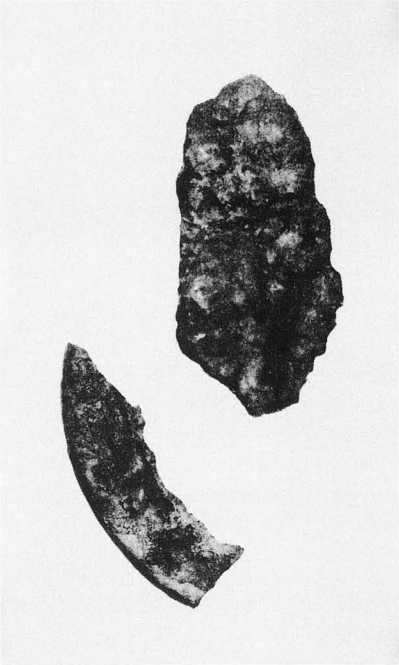




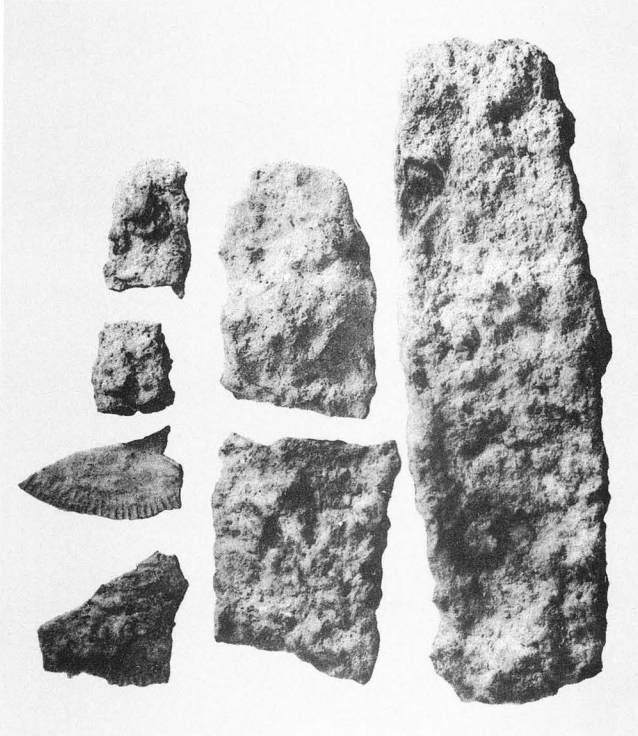
第 3 号石棺出土の内行花文鏡と鉄剣（右の上下）



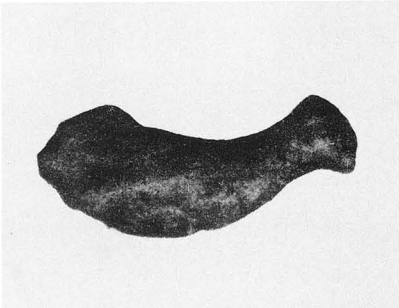
第 3 号石棺出土の鉄鎌・鉄矛



第 3 号石棺出土の鏡片・鉄鏃



第 2 号石棺出土の鏡片・鉄斧など鉄器類



鳥形埴輪

岩崎山第4号古墳発掘調査報告書
快天山古墳発掘調査報告書

発行日　2002（平成14）年3月31日

編集・発行　香川県津田町教育委員会
〒769-2401　香川県大川郡津田町津田138-16
香川県綾歌町教育委員会
〒761-2492　香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638

印刷所　電子印刷株式会社
〒730-0853　広島県広島市中区堺町1-1-5